

Title	Poésiesにおけるパスカル、ヴォーヴナルグの位置 : イジドル・デュカス/ロートレアモンによる書き換え操作の一側面
Author(s)	寺本, 成彦
Citation	Gallia. 34 P.25-P.33
Issue Date	1995-03-11
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/7185">http://hdl.handle.net/11094/7185</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## Poésies におけるパスカル、ヴォーヴナルグの位置

— イジドール・デュカス/ロートレアモンによる書き換え操作の一側面 —

寺 本 成 彦

イジドール・デュカス（ロートレアモン）が1870年4月と6月にそれぞれ出版した2冊の小冊子『ポエジーⅠ』・『ポエジーⅡ』は、前作『マルドロールの歌』出版の頓挫という苦い経験の影響下に構想・執筆された、断章形式の散文作品である。書簡中にも吐露されるように<sup>1)</sup>、そこには前作で自らが模倣したロマン派の詩人・作家たち（バイロン、ユゴー、ラマルティーヌ、ミュッセなど）の諸作品のみならず、自分自身の野心的作品、『マルドロールの歌』さえも否定し、「善」・「希望」などといった肯定的な価値顕揚の方へと自分自身を、そして「文学」そのものをも転換させようという、あまりにも強固な意志が反映されねばならなかったことは周知のとおりである。事実それは、とりわけ第1分冊である『ポエジーⅠ』が一種ロマン派諸作家・詩人の固有名目録の観を呈し、彼らへのいちぢな否定的（批評的）言辞に満ちていることを目にすれば容易に納得されるであろう。さて、その第1分冊を「理論篇」とするなら、第2分冊の『ポエジーⅡ』は主として「実践篇」にあたり<sup>2)</sup>、書簡中でも既に告げられていたように、全159個中78個の断章が他の作家の既存のテキストの訂正・書き直し（デュカス言うところの「剽窃」« plagiat »<sup>3)</sup>）で占められている。ところがその78個の「剽窃」の内訳を見る時、詩人自身の予告に反して、ロマン派に属する、あるいはその強い影響下にある詩人の作品が取り上げられる割合は極めて小さく（4個）<sup>4)</sup>、それに

1) Cf. 1870年2月21日付、プーレ=マラン宛書簡 (Lautréamont, Germain Nouveau, *Œuvres complètes*, Gallimard (Pléiade), 1970, p.298. 以下『ポエジーⅡ』を引用する際にはこの版を用い、P. IIと略記の上、断章番号をアラビア数字でつけ、さらにプレイヤッド版での頁数を付記する)。ただしこの書簡は、プレイヤッド版では「ヴェルボエッコーヴェン宛」と誤って推定されている。

2) 但し諸作家の書き換え以外にも、『ポエジーⅠ』同様理論的考察はある。

3) Cf. 「剽窃は必要である。進歩がそれを内包する。剽窃はある作者の文に密着し、その諸表現を用い、何か偽りの観念を消し去って、正しい観念で置き換える。」(P. II, 59; p.281. 邦訳は豊崎光一訳を基本とする)。

4) ラマルティーヌ、ユゴー、ボードレール、さらに自分自身の作品を1篇ずつ書き換えている。最初の3篇については韻文から散文への改変が、また4篇全てには「圧縮化」とでも名づけるべき省略がなされている点が興味深い。

対して概括的に「モラリスト」と呼びならわされている作家・思想家による、「箴言」maximeと通常分類されるテキストがそのほとんどを占めている(72個)<sup>5)</sup>の気づくことになる。本論は『ポエジーⅡ』で書き換え作用を受けたモラリストたちのうち、特に二人だけで作品の大きな部分を占めることになるパスカルとヴォーヴナルグとに焦点を当て、彼らのテキストが実際いかなる改変を受けているのかを具体的に見ていくことにする。そして「ロマン派糾弾の書」ともいふべき『ポエジー』において、ある意味で対照的なこの17世紀と18世紀のモラリスト二人が、なぜこのように対をなす形で問題化され俎上にのせられねばならなかったのか、その意義を探ってみようと思う。

## I. ゲームの規則：いかに「剽窃」するか

『ポエジーⅡ』での書き換えの操作、それは一見言語遊戯のように見えてこないでもない。例えば『ポエジー』の創作原理にも関連する断章11番を、元のパスカルによるテキストと並べ、比較検討してみよう。

——『パンセ』(コンドルセ版)<sup>6)</sup>：

J'écrirai licil mes pensées **sans** ordre, {et| {non pas| {peut-être| dans une  
<sup>A</sup> **【confusion】** sans <sup>B</sup> **【dessein】** ; c'est le véritable ordre, {et| {qui| marquera  
 {toujours| mon objet par le désordre {même|.

Je ferais trop d'honneur à mon sujet si je le traitais avec ordre, {puisquel  
 je veux montrer qu'il en est **incapable**. (Pascal, IV, 1)

——『ポエジーⅡ』：

J'écrirai mes pensées **avec** ordre, par un <sup>B</sup> **【dessein】** sans <sup>A</sup> **【confusion】**.

- 5) その内訳は、パスカル：32個、ヴォーヴナルグ：35個、ラ=ロシュフコー：4個、ラ=ブリュイエル：1個となっている(それ以外に、ダンテ、シェイクスピアからの剽窃も1個ずつあることを付記しておく)。
- 6) 『ポエジーⅡ』執筆にあたりデュカスが参照したのは、『パンセ』の「コンドルセ版」であると証明されている(Cf. Bernard Croquette, « Le (contre) Pascal d'Isidore Ducasse », in *Revue d'Histoire littéraire de la France*, n° 74, 1974, pp.447-455)。この今日では全く流布していないコンドルセ版のテキストは、ステンメースによる『ロートレアモン全集』の註で見ることができる(Isidore Ducasse, Comte de Lautréamont, *Les Chants de Maldoror, Poésies I et II*, Introduction et notes par Jean-Luc Steinmez, GF-Flammarion, 1990)。本論で引用する『パンセ』のテキストは全てこのGFフラマリオン版の註に収録されたものにより、“Pascal, IV, 1”(=第4項第1節)などと略記する。ただこの編者は不注意からか、『ポエジーⅡ』断章124番以降がほぼ全てラ=ロシュフコーのテキストの書き換えであると誤記し(実はヴォーヴナルグ)、断章22番のスルスに出典を付けず(Pascal, VI, 14)、さらに断章111番のスルス(Pascal, IV, 17)を収録し忘れて……三番目の欠落に関しては、論者の参照し得たネジヨンの手になる哲学辞典(Jacques-André Naigeon, *Dictionnaire critique et raisonné de la Philosophie ancienne et moderne*, H. Agasse, 1793)に収録されたコンドルセ版準拠の『パンセ』により、句読点上の無視し得る微細な差はあれ、プレイヤッド版『ロートレアモン全集』の註に収録されている「ポール・ロワイヤル版」のテキストとの一致が確認された。

〈Si elles sont justes, la première venue sera la conséquence des autres.〉 C'est le véritable ordre. Il marque mon objet par le désordre 〈calligraphique〉. Je ferais trop de **déshonneur** à mon sujet, si je 〈ne〉 le traitais 〈pas〉 avec ordre. Je veux montrer qu'il en est **capable**. (P. II, 11 ; p.275)

(ゴチック体：反意語・対義語に置き換えられた語；下線部：他の語に置き換えられた語；| |：除去される部分；【 】：相互に入れ換えられる部分；〈 〉：付加された部分)

ここに見られる断章が出てきてしばらく後の断章19番で追認されることではあるが、1) いくつかの語の反意語・対義語への置き換え (sans → avec, honneur → déshonneur, incapable → capable)、2) 肯定表現の否定表現への、あるいは否定表現の肯定表現への置き換え (non pas の消去、ne ~ pas の付加)、3) 2つの語あるいは語群の置換 (【 】内の語) がなされ、さらに、4) 断章全体の「意義」signification が転倒させられている (秩序なく書く→秩序立てて書く) のが見て取れる。ただ、見逃してはならない (見逃しようがない) のは、断章59番でやはり事後的に表明されることになる、5) 「表現」 (=文の全体図式) の忠実な再現である。以上観察できる5つの規則<sup>7)</sup>のみを適用して書き換えの操作がもし行なわれていたとしたら、『ポエジー II』中の一連の「剽窃」は、「言語遊戯」と呼んでもさしつかえないところであったろう。だが実際には剽窃者の操作は註3で見たように、誤った観念を正しい観念に置き換えるという、多分にイデオロギー的な方向性を持ち、純粋な「遊戯」の持つ全き無償性からはどうやら逸脱して行かざるをえないのである。

最後に6番目の規則として、他の5個の規則と異なり、もとの文章の絶対量とでも言うべきものを減少させていく操作があることも見落とさないでおこう。例えば上の引用を比較すれば明らかのように、接続詞 (et, puisque)、副詞 (ici, peut-être, toujours, même)、関係代名詞 (qui) が消し去られているのである。この引用だけを見ればそれほど問題化するまでもない、取るに足りないことのように思われるかもしれない。ただこの現象が『ポエジー II』中の78個の「剽窃」のほぼすべてにおいて極めて執拗に起こっていく有り様は、到底無視しえない事態としての位置づけを要求してくる<sup>8)</sup>。なぜならこの操作は主として、各断章を構成する文の内部あるいは前後での論理関係を目に見える形で明示することを避け (接続詞の消去)、加えて従属文を主文へと作り変えていく (接続詞・関係代名詞

7) 引用中〈 〉で示したような新たな文章の付加は他ではほとんどなされないで、「原則として元のテキストに新たな文を追加しない」を補則としてあげておく。

8) 論者の概算によると、「et」「mais」「puisque」「parce que」「car」「peut-être」「tout」の抹

の消去) という結果を引き起こすのだから。その操作の後に得られるのは全ページの大半を占める、明示的な論理関係を欠いた主文の集積ということになる。確かにいかに目に見えるような論理関係が消し去られていようとも、読み手が各文章の間の論理関係を推測し忖度しながら読み取っていくことは通常行なわれていることであるが、こうして丹念に接続詞・関係代名詞などを抹消された断章群は、その個々の断章の内部自体にさえも断片化の契機を潜めた文の集積として立ち現われてこざるをえないであろう。

さて最初に見た断章11番の書き換え例はその意義内容の全き転倒から、「純粹で単純な否定」(négation pure et simple<sup>9)</sup>)ないし「全体否定」(négation totale<sup>10)</sup>)と分類され、われわれ読み手にはとりわけ強い衝撃を与えるものだが、それに対し次にあげるような、「二重否定」(double négation<sup>9)</sup>)ないし「シンメトリー的否定」(négation symétrique<sup>10)</sup>)とされる断章もいくつか目にするようになる。

——『考察と箴言』<sup>11)</sup>：

On **méprise** les grands desseins, lorsqu'on {ne} se sent {pas} capable des grands succès. (R.M., 88)

(人は大いなる成功を取める能力を感じない時、大いなる企てを軽蔑する。)

——『ポエジー II』：

On **estime** les grands desseins, lorsqu'on se sent capable des grands desseins. (P. II, 134 ; p.290)

(人は大いなる成功を取める能力を感じる時、大いなる企てを尊ぶ。)

ここに並べたヴォーヴナルグの元の断章と、剽窃者による断章との「論理的で一般的な意味<sup>10)</sup>」は変わらず、相矛盾することなく両立するのは明白だ。ただデュカスによるこの操作が、クリステヴァの言うように、「もともとのテキストに新しい意味、反-人間主義的、反-感傷主義的、反-ロマン主義的な意味をしのび込ませてしまう<sup>10)</sup>」効果を全般的に持っているとは考えにくいであろう。それはむ

---

消数・抹消率が極めて大きく、まずそれら全てを抹消することから書き換えが始まったという印象さえ持たれるほどである。なお、『ポエジー』での各断章間の不連続性・断片化については次の論考を参照のこと：番場寛「イジドール・デュカス『ポエジー』の連続性と不連続性——『ポエジー』を読む(2)」、『中大仏文研究』、第22号、1990、pp.17-37。なおこの操作は、本論の註4で触れた「圧縮化」の現れの一つと見做すべきだろう。

9) Gérard Genette, *Palimpsestes*, Seuil, 1982, p.48.

10) Julia Kristeva, *Σημειωτική* (Extraits), Seuil (Points), p.195.

11) Vauvenargues, *Réflexions et Maximes* dans *Œuvres de Vauvenargues*, Édition nouvelle accompagnée de notes et commentaires par D.-L. Gilbert, Furne, 1857, t.I, p.382. 以下も R.M. と略記の上、断章番号をアラビア数字で示す。

しろ、上の例に即するならある同一の論理的な意味が可能にする2つの命題のうち、それ自体でより肯定的な側面の強い表現を採用する（あるいはそれへと加工しなおす）という傾向を認めるべきではないだろうか。やはりヴォーヴナルグからの「剽窃」の例をもうひとつ見てみよう。

——『考察と箴言』：

On dit {peu} de choses solides, lorsqu'on cherche à en dire d'extraordinaires. (R.M., 112)

(人は並はずれたことを言おうと努める時、しっかりしたことはほとんど言わないものだ。)

——『ポエジー II』：

On dit des choses solides, lorsqu'on <ne> cherche <pas> à en dire d'extraordinaire. (P. II, 136 ; p.290)

(人は並はずれたことを言おうと努めぬ時、しっかりしたことを言うものだ。)

この二つの断章にしても、両者の一般的論理的な意味は同一であるが、デュカスの方がやはりそれ自体で肯定的な表現（「人はしっかりしたことを言うものだ」）を得るべく、改変を行なっているのは否定しがたいであろう（そしてこの点こそが、前作『マルドロールの歌』の「黒いユーモア」に慣れ親しんだ読者を途方に暮れさせるのだが）。

さて、上に見てきたような、ある意味で「成功」した書き換えの他に、その頻度は極めて低いにしても、書き換えをしたために論理上のある矛盾を生じ、一個の断章中に埋めがたい断絶面を作ってしまったと受け取られる例も指摘しなければならぬだろう。

——『パンセ』（コンドルセ版）：

Plusieurs choses certaines sont contredites ; plusieurs fausses passent sans contradictions : {ni} la contradiction {n'} est marque de fausseté, {ni} l'incontradiction {n'} est marque de yérité. (Pascal, IV, 5)

(いくつかの確実な事柄が反論されている。いくつかの偽りの事柄が反論されずにまかり通っている。反論が偽物のしるしでもなく、反論のないことが真実のしるしでもない。)

——『ポエジーⅡ』：

Plusieurs choses certaines sont contredites. Plusieurs <choses> fausses sont incontredites. La contradiction est <la> marque de la fausseté. L'incontradiction est <la> marque de la certitude. (P. II, 84 ; p.284)

(いくつかの確実な事柄が反論されている。いくつかの偽りの事柄が反論されていない。反論は偽物のしるしである。反論のないのは確実さのしるしである。)

両者の引用中、それぞれ後半の帰結部は、極めてきわだった違いを見せている。前者のパスカルの一節では帰結部が異論の余地のない論理的整合性を持つのに対し、後者の「剽窃」された断章では、前提部との論理的なつながりが全く断たれた後半の下線部がいわば宙吊り状態となり、帰結部と呼べるものでさえなくなっているのである。剽窃者にとってはその効果についても十分に意識的であったに違いないこの書き換えは、『ポエジーⅡ』に見られる傾向としてさきほど確認した各断章内での断片化作用の、まさしくもっとも根底的な様相を示すものとは取れないであろうか。

以上見てきたように、「剽窃」はさまざまな仕方で元のテキストを作り変えている。だがここで今一度注意を喚起しておきたいのは、この変容作用によって得られた新たなテキストが、抹消したはずの元のテキストを逆説的な仕方で忠実に再生し再現していることだ。『ポエジーⅡ』の「剽窃」による否定作用の分類をする際クリステヴァも言うように、改変の対象となるテキストと改変後のテキストとは「同時に読まれることを前提にし<sup>12)</sup>」、「二つの意味の非統合的統合が求められている<sup>13)</sup>」。言い換えるなら、改変後のテキスト群を読みながら、読者はやはりそこにパスカルないしヴォーヴナルグのテキストをいわば二重写しにして一語一語読んでいるのであり、ある意味で特殊なこの読書行為はもちろん書き手である剽窃者によっても、書く行為と同時的になされているのは言うまでもないだろう。そして視点を変えるなら、その剽窃行為とはまぎれもなく、プルーストやクノーらに見られる“文体練習”の一つに他ならないのだ。それは例えばピエルサンスとともに、「デュカスはパスカルを今一度やり直したかった。つまりパスカルになり、パスカルを変形し、パスカルを演じようとしたのだ<sup>13)</sup>」と評価し、『ポエ

12) J. Kristeva, *op. cit.*, p.195.

13) Michel Pierssens, *Lautréamont, éthique à Maldoror*, Lille, Presses Universitaires de Lille (Objet), 1984, p.192.

ジー』というタイトルそのものがパスカルの『パンセ』にその着想を得たのではないかという推測をするよう促すであろう<sup>14)</sup>。ただこのロートレアモン研究者の卓抜な視点からは、文学史上も思想史上もパスカルほどには光を放っていないもう一人のモラリスト、ヴォーヴナルグが抜け落ちてしまっている。それゆえここでもう一度問わねばならない。なぜパスカルとヴォーヴナルグなのか。

## II. 二人のモラリストを註釈するヴォルテール～他テキスト参照性の網目の中へ

『ポエジー II』のパスカルからの「剽窃」には、読み手の文学的記憶を刺激するあまり、一種滑稽さの印象さえ与えてしまう、そんな断章がある。

人間は一本の樫である。自然はこれより頑丈な物を数えることはできない。それを護るために宇宙が武装する必要はない。一滴の水ではその保存には足りない。たとえ宇宙がそれを護ろうとも、この樫はそれを保存しない物以上に不名誉ということにはなるまい。人間は自分の治世には死がないこと、宇宙には始まりがあることを知っている。宇宙は何も知らない。——せいぜいのところ、それは考える葦なのだ。(P. II, 14 ; p.275)

あまりに名高い「考える葦」(『パンセ』コンドルセ版、第6項第5節)のもじりであることは言うまでもない。ここでは『パンセ』にはなかった形象=「樫」が新たに導入された後、「隠喩の転倒」(renversement de métaphore<sup>15)</sup>)と名づけられる操作によって、「人間」=「樫」／「宇宙」=「考える葦」という新規な類似関係による結びつきが提示される。『パンセ』の数ある断章中でもすぐれて詩的イメージに満ち、人口に膾炙してきたこの一節は「剽窃」の強力な批評性-批判性にさらされ、ここに見られるような決定的なずれをこうむっている。さてこの隠喩の転倒の源泉と目されるものとして、ゴルドファンとルガールはラ=フォンテーヌの寓話、「樫と葦」«Le Chêne et le Roseau»をあげている<sup>16)</sup>。風にびくともしない頑丈さを誇る樫は、微風にも大きくしなるか弱い葦を憐れむが、その柔軟性の欠如のために大風に吹かれて根こぎにされ、かえって葦の方はたわむことで生き

14) ピエルサンズは“パンセ”／“ポエジー”という音の響きの近さに注目するが(*Ibid.*)、それ以上に *Pensées* / *Poésies* という視覚上の類似も無視できないように思われる。さらには前者がタイトルとして個々の断章=«pensée»の集合体を表すのと平行的に、後者のタイトルも«poésie»の集積と捉える時、やはりこの論者の言う「個々の節 [=断章] がひとつひとつの詩 [poème=poésie] をなしている」(*Ibid.*, p.193)という見解がより説得性を持つてくるのだ。

15) G. Genette, *op. cit.*, p.48.

16) Cf. Isidore Ducasse, Comte de Lautréamont, *Poésies*, première édition commentée par Georges Goldfayn et Gérard Legrand, Le Terrain Vague, 1960, p.103.



残る、という内容のこの寓話が、『ポエジーⅡ』での書き換えのヒントであったのは充分考えられることだ。ただ、「頑丈な物が弱く、か弱そうな物がかえって強いものだ」というこの寓話に暗に盛り込まれた教訓<sup>モラリテ</sup>の逆説性は改変作用を経て抹消され、「樅=頑丈」／「葦=脆弱」なる常套句<sup>リュウ・コマン</sup>的発想へと回帰していることは相違点として留意すべきであろう。

ところでこの「樅」と「葦」という形象にまつわる常套句<sup>リュウ・コマン</sup>的発想は、デュカスが目にした蓋然性の高いと思われる今一つの著作、それもまさしくパスカルの『パンセ』を批評-批判している作品の一節にも見られるのである。

この著者たち〔パスカルも含めた、キリスト教護教作家たち〕は、イエス・キリストや使徒たち以上にキリスト教のことを知っているというのだろうか。それは葦をめぐらして樅の木を支えようとするものである。こうした役に立たない葦を取り除いたところで、木を損なう心配はない<sup>17)</sup>。

それ自体、パスカルの「考える葦」へと指し向けられているとも考えられるこの引用は、ヴォルテールの『哲学書簡』中「第25信、パスカル氏の『パンセ』について」の冒頭部の一節である。その「第25信」でヴォルテールは「パスカルの天才と雄弁を尊重する」とは言うものの、このジャンセニストの「卓越した人間嫌い」に対抗して「あえて人類に味方」すると宣言し、この「第25信」において『パンセ』の断章のうち83個を次々と「訂正」することになるのだ<sup>18)</sup>。そしてこの哲学者=モラリストによる『パンセ』訂正を抜粋したものが、他にもない、デュカスが『ポエジーⅡ』を書くにあたって手元に置いて常に参照していたコンドルセ版『パンセ』の註として流用されているのである<sup>19)</sup>。そしてさらに興味深いことに、『ポエジーⅡ』でクローズアップされている今一人のモラリスト、ヴォーヴナルグの『考察と箴言』の、やはりデュカスが手にしていたと推定されるフルヌ版にあたるならば、やはりその脚註には同じヴォルテールによる批評的コメントが収録されているのがわかるだろう。

パスカルとヴォーヴナルグという二人のモラリストの間で共通して見られる

17) Voltaire, *Lettres philosophiques dans Mélanges*, Gallimard (Pléiade), 1961, p.105. 邦訳は中川信訳（『世界の名著 35-ヴォルテール・デイドロ・ダランベール』、中央公論社、1980年所収の『哲学書簡』）を用いた。

18) Cf. *ibid.*, p.104.

19) 但しヴォルテールの註が付され、なおかつデュカスの書き換えがなされた「パンセ」はそれほど多くなく（4個）、後者の「剽窃」が前者の註釈の内容を具体的に前提としていた形跡も見えない。ただヴォルテールによる註釈中、『パンセ』の一節の一部（だけ）をそのままもじり、一種の「剽窃」をなしているものが少なくとも4例あることは、ジュネットも指摘する通りである（Cf. G. Genette, *op. cit.*, p.47）。

“ヴォルテールによる註釈”というこのつながり<sup>20)</sup>を、単なる偶然の一致として見過ごしていいものであろうか。むしろ、剽窃者になろうとしたデュカスの手の中にあった『パンセ』コンドルセ版および『考察と箴言』フルヌ版とが、彼の「剽窃」の手法の細目を具体的に規定したとまでは言えないにしても、他者のテキストを批評的-批判的措置に付すことで自らのテキストを紡ぎ出し、元のテキストとその改変版とを二重写しに読み取らせようというその企図の、一種の呼び水として作用したとは考えられないだろうか。そうして『ポエジーⅡ』でのパスカル、ヴォーヴナルグの書き換え作用にはこのようにヴォルテールという媒介者が標定されるからには、デュカスの実践する他者のテキストの再組織化は全く純粋な創意であるとは言いがたく、実はパスカル-ヴォーヴナルグというモラリストの選択それ自体が、今一人の哲学者=モラリストの媒介作用により生じた複数のテキストの網目の中への、そして諸テキストの作りなす相互参照性の作用する場への詩人の参入であったと位置づけられるのである。デュカスが「剽窃」の対象としてまずもって採用したジャンルが、「箴言」という典型的なモラリストの文学、すなわちしかじかの作品の再記述 *réécriture* が当然のこととして前提され、常に「(再)記述・(再)読解・(再)版の複雑な作用<sup>21)</sup>」のもとにあるジャンルであったこともまた、まことに意義深く思われてくるのである。

\* \* \*

確かに『ポエジー』は、本来「永続的な刊行物<sup>22)</sup>」であるはずであり、果たされ得なかった第3分冊以降がもしその後も続々と刊行されていたのなら、その企図の全体が一体いかなる相貌を示すことになったのか、それはにわかには推測しがたいことである。ただ、この第2分冊で終わってしまったこと自体が作者の死という偶発的な理由にのみよるとはいえ、その最初の「実践篇」においてこのモラリストたちのテキストを書き換える作業が不可欠であったことは否みがたいのだ。新たなジャンルとして探求されつつあった「ポエジー」« *poésie* »も、前世代のロマン派を支配していた「天才の靈感」という神話を失効させるべく、他者のテキストの織りなす参照の網の目の中で再読-再記述を実践することのうちにこそ、その形を現しつつあったのだから。

(大阪大学助手)

20) 興味深いことに、ヴォーヴナルグからパスカルへの直接的なつながりもある。それは「パスカルの箴言註解」(Vauvenargues, *op. cit.*, pp.81-82)、「パスカルとボシュエについて」(*Ibid.*, pp.273-274)、「モンテーニュとパスカルについて」(*Ibid.*, pp.274-276)といった短いエッセーであるが、それ以外にも「パスカルを模倣する」« *Imitation de Pascal* »(*Ibid.*, pp.220-224)と題された一種の“文体練習”と目されるものさえ見られるほどである。

21) Denis Hollier (dir.), *De la Littérature française*, Bordas, 1993, p.31.

22) Cf. 『ポエジーⅠ』、最終ページに印刷された著者自身による「告示」。